



第127号

## 親 諭

佛教とは、私たちが来世においては必ず善い処に往生できると安心を頂きつつ、現世においては日々幸せに生きるための佛の教えです。

法華經というお経の中ではこの「現世安穩、後生善処」を得るための佛の教えを、日照りが続いているところに現れた大きな雲と雨に譬え、私たちが衆生を暑さと水不足で枯れかかっている草木に譬え、次のような偈で説かれています。

「この世に出現する時は、大きな雲と雨のよう

心身ともに枯れている 草木の衆生を潤おして

苦しみからの解放と 安穩という樂しみを

幸せという喜びと 涅槃の樂を与えよう」

そして、この大雲と恵みの雨という教えは、わが宗においては真盛上人の「無欲清淨 専勤念佛」の教えに他なりません。無欲の心とは正しい心であり、善なる心でありますから、そのためには大目如来から釈迦如来に伝えられた菩薩戒を護り、他人の幸せを願うことが大切です。

清淨の心とは、佛心であり、それは自らが佛の子であることと氣づかせてもらえることによって生ずる清らかな心です。

この無欲清淨の心を持てば、貪り求める心や、怒り恨む心や、間違ったものの見方をする心は淨められ、そのような汚れた心をもっていたことによる諸々の苦しみから解放されるのです。

また、専勤念佛とは、無欲清淨の心をもって、専らに阿彌陀佛の名前をととなえなさい、という教えです。この教えの中で、真盛上人は「念佛の意は知らざれども南無阿彌陀佛、知れども南無阿彌陀佛と唱うれば、則ち極樂に生まれて、彼にて悟を開く要行なり」と諭されました。それはとなえる私たちの能力や知識によって往生が決まるのではなく、ただ無欲清淨の心で阿彌陀佛を信じ、「なむあみだぶつ」ととなえることによって、阿彌陀佛の国に往生することが決定し、安心を頂ける、ということです。

私たちはこのような真盛上人の甘露の法雨を頂くことによって、安穩で幸せな間いのある一日一日を送り、令和四年十一月二日から嚴修される不斷念佛相續十九萬日大法会に値遇したいものです。

総本山西教寺第四十四世

大僧正 真惠

## 念佛の意



天台真盛宗管長 武田 圓寵

新年あけましておめでとうございます。今年も皆様にとって良いお年でありますよう祈念申し上げます。

さて、「念佛の意は知れざれども南無阿彌陀佛、知れども南無阿彌陀佛」のお言葉は真盛上人が時の後土御門天皇の第二の宮に宛てられた書簡の中で書かれているものです。この第二の宮は深く真盛上人に帰依されましたが、御立場上、なかなか真盛上人の教えを直に受けられるということは困難なことでした。まして、天台座主尊応の御弟子としておられましたので、真盛上人の念佛の教えを受けることはより難しかったのでしよう。そのような事情の中で第二の宮の要請に応じられて念佛について説かれた中にこの言葉があります。

その書簡で、真盛上人はその当時のいずれの宗の教えであっても、悟りを開くことが出来るが、念佛を称える浄土の教えは今の時に最も必要な教えである、とし、阿彌陀佛を信じ、称えることこそ大事であり、念佛の意味を知っているかどうかは、大きなことではない、と言われます。とにもかくにも、南無阿彌陀佛と称えなさい、そうすれば必ず極樂浄土に往生して、そこで悟りを開くことが出来る、という確信を宣べておられるのです。

「このうれば 佛もわれもなかりけり 南無阿彌陀佛 なむあみだぶつ」の境地でありますよう。

# 知らざれども南無阿弥陀仏 知れども南無阿弥陀仏

— 真盛上人 尊盛法親王あて書簡より —

— 不断念佛相続十九萬日大法会に向けて —

## 「念佛三昧の一年」運動 展開中

令和三年十一月～令和四年十月

当初令和三年に予定をされていた不断念佛相続十九萬日大法会は、「コロナ禍」と称される不測の事態により、令和四年へ一年間延期することとなり

ました。

私たちは、その一年間を「念佛三昧の一年」として、一宗をあげて有縁の方々とともに様々な機会に様々なかた

ちでお念佛にいそしみ、併せて不断念佛相続の意義を幅広くお示しをする期間と位置づけました。その間、ひとりでも多くの方々に阿弥陀さまの慈悲と智慧の光を感じていただくことを目指す、文字通りコロナという禍を転じて福となさんとする運動です。

本山をはじめ宗内の各寺院において幅広く別時念佛会を催すほか、年忌法要・中陰法要・月参りなどあらゆる法要の中で「ミニ別時念佛」といったかたちで、たとえわずかな時間でもご参詣の皆さまとともに一心にお念佛を称

えていただくことを呼びかけています。そのことは、皆さまが五百年來続く本宗の不断念佛相続の列に加わっていただき、真盛上人が『念佛三昧に入りぬれば、極楽もただちに現じ』（念佛三昧法語）と諭された境地を、いささかも実感いただくことに繋がるのではないのでしょうか。

私たちはそうした取り組みのすべてを「お待ち受け法要」とし、その集大成として令和四年十一月の不断念佛相続十九萬日大法会を、数多くの方々の喜びとともに迎えたいと念じています。



「念佛三昧の一年」運動の各種行事の様子を、インスタグラムでご覧いただけます。下のQRコードからアクセスをお願いします。



OTSU.SAIKYOJI

天台真盛宗  
滋賀県大津市坂本  
五丁目十三一  
電話…〇七七・五七八一  
〇〇一三

# 総本山西教寺での四十八日別時念佛会

伊勢教区 西盛寺 副住職 石山 覚勝

現在私は津市美杉町の西向院で称名念佛の日々を過ごしつつ、これまで仲間と共に様々な場所で別時念佛会を修行してきました。ある時は比叡山の黒谷青龍寺で六万返の別時念佛会を勤修し、また平成二十八年には津市白山町成願寺の四十八日別時念佛会に参加したいへん貴重な修行をさせていただきました。そんな中で「天台真盛宗の僧侶であるからには、いつかは総本山西教寺での四十八日別時念佛会に値遇したいものだ」と、仲間と淡い夢を語り合ったものです。

新型コロナウイルス感染拡大により、不断念佛相続十九萬日大法会が一年延期となりました。そこで総本山は一年後の大法会をただ待つのではなく、一宗を上げて称名念佛に邁進しながら不断念佛相続の意義を幅広く世に示す「念佛三昧の一年」と位置づけ、更にその一環として、なんと総本山西教寺で百年ぶりの四十八日別時念佛会の開催が決定いたしました。しかも幸運なこと、私が仲間と参加させていた

けることになったのです。まさに「禍転じて福となす」出来事であり、念佛が「コロナのせい」を「コロナのおかげ」に変え、念佛が私たちの夢を叶えてくださったのです。

## 大勢の上人が参加

四十八日の期間中、私は十五日ほど参加させていただきました。朝十時に称名念佛が始まると、三十分ごとに僧侶が交代し、夕方四時まで続きます。その間念佛の声の鉦と音が断えることなく、しかも十一時には猊下のご親教とお十念、まるでこの世に出現した極楽浄土のよう

で、私は本堂から離れるのが勿体なくて、一日中本堂



で法悦に浸ったものです。

期間中は滋賀教区をはじめ、各教区より有志の上人が参加して下さいました。初対面の上人とのご縁、また遠くから先輩や仲間が応援に駆けつけて下さいました。「念佛しにきたで！」「ごころうさま！」「風邪ひくなよ！」と声をかけてもらったり、肩をポンと叩かれると涙が出るほどうれしかったです。本山の皆さまにもたいへん親切にしていた頂き、ありがたい念佛三昧の日々を過ごすことができました。

## 大勢の一般参詣者との交流

「麒麟がくる」効果と、紅葉の時期ということもあり、西教寺には毎日大勢の、特に土日には千人以上の一般参詣者が。私の日課は本堂の入口でお客様を合掌で出迎え「百年ぶりの四十八日念佛会へようこそ。しばしの間心静かに、木魚を鳴らして南無阿弥陀仏と称えてみては？」と案内すると、ほとんどの方が念佛をしてくださり、中には「本当ですか？うれしい！」と大喜びの方も。念佛後に「心がスッキリした」「無心になった」「念佛ってお葬式や法事のときにだけ称えるものだと思っていたけど、ありがたかった！」など色々な感想が聞けました。ある若い男性は「少しだけでもいいですか？」

と念佛を始め、結局一時間近く称え「なぜか止まらなくなってしまいました！いい体験ができました！」と晴れやかな表情で本堂を後にされました。皆が西教寺本堂という宝の山に入り、嬉しそうに表情で本堂を後にするのは、まさに「宝の山に入りながら手を空しくして帰ることなかれ」のみ教え通りで感激いたしました。

## 今回の修行で学んだこと

念佛を称え続けたからと言って、何かすごいことが起こるわけでもない。相変わらず嫌なことはあるし、思い通りにならないこともある。しかし少しずつ、阿弥陀如来や真盛上人や先祖の慈悲を感じ、たとえ思い通りにならなくても当たり前、不足に愚痴するのではなく、今生きていることがありがたいと思えるようになってきました。

また、たくさんの人の親切が心に沁みる感動の日々でした。管長猊下をはじめ、一緒に念佛して下さいた皆様、お世話になった本山の皆様、食堂、研修道場、売店の皆様、そして何より、四十八日間の苦楽を共にしてくれた西山真圭、黒川真成両上人に、心より感謝お礼申し上げます。

# 伊賀西連寺の「別時念仏会」に参加して

伊賀西連寺役員会 会長 田中 徹

新年明けまして

おめでとうございます

檀信徒の皆様には清々しい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、昨年十一月二日から八日まで総本山西教寺において修行される不断念佛相続十九萬日大法会はコロナ禍で一年延期になり本年厳修されることになりました。

このため、昨年十月二十九日念仏を唱えて雑念を取り払う「別時念仏会」が当伊賀西連寺で営まれました。天台真盛宗総本山「西教寺」より武田圓龍官長様始め他八名の僧侶が態々お運び頂き、また末寺の住職様及び役員等約百人が参列してコロナ禍で不便の多い



今日ですが一日も早い平穏な日々が戻りますようお願い念仏を称えました。

私たちは真盛上人が今から五百年前「無欲清浄・専勤念仏」というご遺誠を残してお亡くなりになりました。その意味は「人間として踏み外してはならない道をきちんと守り、生かされている自分に感謝することを忘れない生活を勧めたのです。言い換えれば自分中心を捨て、仏様の本願に素直に任せた生活をする事と思います。

今日の社会に起こっている親が子を、子が親を殺す、悪徳商人の横行、子供のいじめ等、他人がどうなってもいい自己中心の考え方、他人の痛みをわかってほしい心の貧しさが起因となっています。「人間は浄土に往生するために生きてるのであって、実現しない限り本当に満たされることはない」お釈迦様は「一切衆生・悉有仏性」即ち全ての物に仏性を認め、みんな仏になれると説いています。生きとして生けるものは、仏様のご慈悲の中で生かされています。毎日毎日手を合わせる生活の中から次第に気づかせてもらうことが出来るのではないのでしょうか。

最後になりましたが「天台宗総本山西教寺」のご繁栄と、檀信徒の皆様のご多幸・ご健勝をお祈りして新春のご挨拶いたします。

## ご祈願のご案内

歓喜天(聖天)

## 大般若転読会祈願法要

西教寺の安養院聖天堂では、歓喜天(聖天さん)をお祀りしております。

歓喜天は、頭は象、身体は人間の姿をした仏教守護神といわれております。あらゆる障害や困難を取り除き、福德をもたらす強力な天部の仏さまです。

西教寺では、毎年一月十六日(他に五月十六日・九月十六日)に歓喜天御宝前におきまして、武田管長親下御導師のもと、内局・一山が出仕して大般若転読会祈願法要をお勤めさせていただいております。国家安穩・寺門繁栄・檀信徒の皆さまの息災を祈願して、六百巻の「大般若経」が賑やかに「転読」されております。また、同時に皆さまの各種ご祈願も受け付けております。

詳しくは左記をご参照ください。

祈願料(一祈願) 三千元

祈願内容

- ・家内安全 ・商売繁盛
- ・病氣平癒 ・身体健康
- ・心願成就など

※こちらに掲載されていないご祈願も承ります。

ご参詣にお越しの場合  
日時

令和四年一月十六日 午前十一時

## 受付

午前十時～午前十一時

法要終了後、祈願御札を授与し、食堂にて大根煮のお食事をご用意しております。郵送・振込によるお申込も受け付けております。

## 郵送の場合

現金書留にて一月十三日までに必着でお送りください。(必ず祈願内容を明記ください)

## お振込みの場合

左記の口座番号に一月十二日までに振込みください。お振込用紙の備考欄に必ず氏名・住所・電話番号・祈願の内容を明記ください。

郵便局

振替口座

009600031636

本山西教寺 寺務所会計課

ご郵送・お振込みの方は、後日、ご祈願させていただきました御札をお送りさせていただきます。



# 現代こそ必要な真盛上人の教え

高勝寺プロジェクト推進員 林 京子



上野浄名院の伺い地蔵たち

私は東北大学大学院日本思想史研究室で真盛上人の研究を行いました。真盛上人の生きた時代は現代と良く似ており、コロナで次々に人が亡くなっているのに為政者が自らの利権や政局に迷走する姿は、応仁の乱の後、権力者たちが文化を享受する姿と重なります。その欺瞞を痛烈に批判した真盛上人は

どのような気持で人々に向き合ったのでしょうか。

真盛上人は地蔵の化身とされていましたが、栃木県栃木市の岩船山は生身の地蔵出現の霊地で高勝寺という天台寺院があります。私は高勝寺の文化史研究を行っているのですが、昨年夏に東京の池袋から一体の地蔵が遷座したことで、明治期に地蔵の化身とされた妙運と天台真盛宗と関わりを知ることができました。明治九年に上野寛永寺浄名院の住職となった妙運は自ら「天台地蔵比丘」と名乗り八万四千体の地蔵建立を発願しました。その時妙運に協力したのが天台真盛宗の桑門即伝上人でした。

天台真盛宗は、真朗上人の尽力で明治初期に天台宗から独立します。即伝上人は西来寺の即信上人の御弟子で、真朗上人を助け寛永寺末寺に説教所を開設し布教を行いました。自ら「天台地蔵比丘」と名乗って人々と向き合う妙運の姿に、即伝上人は宗祖のお姿を

感じたのでしょうか。所縁の寺院には八万四千体地蔵が今も人知れず建っていると思われます。

妙運は岩船山を地蔵霊地として重視しました。地蔵建立がもつとも盛んに行われたのは明治末で、日本が軍国主義に進む中、明治三十年頃までに六万體以上が造られました。それとは別に、浄名院の妙運の信者達は妙運の分身として二体の石地蔵を造立して家から家へ巡行させ、持ちあげて心願を占いました。昭和末期、一体は浄名院に戻りましたが、池袋を回っていた一体は行方不明となりました。前述の地蔵がそれで、因縁に導かれて岩船山に帰還したのです。私は生身の地蔵は今も六道を歩き続けているのだと恐懼しました。私の師、西村玲先生は「世俗的な合理性の行き着く果ては（略）対象をつねに自分の尺度にあわせて思考する思考、すべてを無前提に自己と同一化する思考に墮すだろう」と述べています。江戸時代の仏教不要論者、富永仲基も「止悪行善」を言いますが、それは真盛上人とは似て非なるものです。彼の「悪」とは「人が作った法律違反」です。すから、いじめや環境汚染等「法律で罰せられない」悪行が後を絶ちません。

真盛上人の止悪行善とは「仏様の前でもそれができるのか」という絶対的な基準を持つものなのです。

コロナ禍の今、多くの人が「自分基準」の思考で弱い人や苦しむ人を「弱者」と一括して見殺しにし、効率や経済活動にのみ価値を見出していないのでしょうか？それは真盛上人の教えの対極の思想です。妙運は学僧の道を捨て、地蔵比丘と名乗り真盛上人と同様に悲しみ苦しむ人々の心に寄り添い、この世に出現した地蔵として自分を捨てて生きることを決意・覚悟されたのです。

今コロナ禍でお寺をとりまく状況は厳しいのですが、宗門の皆さまひとりひとりが地蔵となつて、できる範囲で良いので、弱い立場の人たち（特に女性や子どもなど）の苦しみや悲しみに批判や教誨なしに寄り添って歩くことが、現代こそとても大事なのではないのでしょうか。それが宗祖上人のお心であり、求められていることだと思うのです。

## 【参考文献】

西村玲『近世仏教思想の独創…僧侶普寂の思想と実践』トランスビュー、2008  
林京子「伺い地蔵」の帰還」西郊民俗(255) 2021



成願寺の腰かけの阿弥陀如来を配した企画展図録の表紙

に、伝えられた北畠氏の文書も展示したのでした。

さて、展示は大きく四章に分かれています。第一章「北畠氏と信仰」では、北畠氏からの文書を中心に、来迎寺、智禅寺に伝わる文書も含めて展示しました。

三重県総合博物館（津市）では、十月一日（金）から十一月二十七日（土）まで企画展「寺院に伝わる戦国の残像〜北畠氏のいた時代〜」を開催いたしました。戦国時代の展示ということで、皆様のご協力を得て真盛上人に関する内容を多く盛り込みました。また、天台真盛宗の品と北畠氏関連の品を中心に、さまざまな宗派の資料も展示しました。様々な宗派の方に天台真盛宗を紹介するとともに、天台真盛宗の方々には、上人の由緒地にあたる他宗派の

寺院を含む当時の三重県域の宗教界の様子を知っていただければという企図もございました。『真盛上人往生伝記』には、その頃伊勢神宮周辺を攻めた伊勢国司北畠氏にいくさの非を説きさめた事蹟が掲載されています。その舞台となったのは、当時北畠氏が陣所とした臨済宗の安養寺（明和町）でした。なお、その頃、真盛上人が説法を行っていたという浄土宗の延命寺（松阪市）には、北畠氏が寄進した山門が存在しております。これらの寺院の来歴とともに

## 三重県総合博物館の企画展 「寺院に伝わる戦国の残像〜北畠氏のいた時代〜」 で天台真盛宗の資料を多数展示しました

三重県総合博物館 学芸員 太田 光俊



展示室の様子（西教寺からお借りした真盛上人の袈裟、腰かけの阿弥陀如来、林性寺の涅槃図の展示）

第二章「安濃津と中世寺院と長野氏」では、津の中世寺院を取り上げました。真盛上人が説法したという真言宗の観音寺塔頭不動院が記された江戸時代の絵図とともに、「日ノ丸御影」をはじめとした西来寺の中世資料を多く展示しました。また、この章では、福蔵寺の真盛上人の画（絵）伝、智禅寺、浄土寺、九品寺に伝わる肖像画、終焉の地西蓮寺の往生要集をはじめとする諸資料をまとめて展示しました。第三章「村と寺〜小倭郷と成願寺」では、真盛上人の念持仏であり臨終仏でもある成願寺の重要文化財阿弥陀如来倚像を中心に展示を展開しました。第四章「語

り継がれる室町・戦国時代」では、国学や他宗派の教学も盛り上がる中、天台真盛宗では妙有上人、法道上人らの活躍により研究、出版が盛んであったことを紹介いたしました。

今回の企画展は、西来寺、伊勢教区宗務支所の皆様のご協力を得て、真盛上人ゆかりの誕生寺、成願寺の調査を起点として約三年間にわたって行った寺院調査の成果を活用し開催したものです。各寺院の皆様はじめ、途中からは伊賀の西蓮寺、九品寺の皆様のご協力も得て調査をさらに充実させることができました。残念ながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、県外調査は最小限となりましたが、展示の際は総本山西教寺様、大津市歴史博物館様のご協力を得て、成願寺、九品寺、西方寺から総本山に寄進された袈裟や名号などを借用し、里帰り展示をすることもできました。

展示を終えて省みますと、三重県における天台真盛宗の歴史は大変奥深く、さらに調査を進め、研究をより充実させていく必要を痛感しております。今後皆様のご協力を得まして、調査研究を行い、展示あるいは発表の形で展開できればと考えております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



宗祖大師殿 唐門袖堀前に建立 真盛上人霊場第一番御詠歌を刻した石碑

山内局、鑽仰会役員が石碑前へご参集、除幕式中宗祖大師二十五霊場第一番の御詠歌を唱和し、続いて圓頓章・觀經文のあと、不断念佛相続十九萬日大法会百八念佛をお勤めました。今般の石碑建立に際し、多数の方よりご浄財を賜り、厚く御礼申し上げます。石碑建立ご浄財ご寄進者名簿、記念写経は石碑下にお納めし、ご浄財寄進者のご芳名は、本会機関紙『みちびき』第5号に掲載しました。

石碑除幕式のあと、御導師・式衆・御詠歌講が宗祖大師殿へご入堂され、鑽仰法要勤行式をお勤め、觀經文のあと、不断念佛相続十九萬日大法会百八念佛を唱和しました。堂内に響く莊嚴な鉦と木魚の音に、参加者一同法悦を味わいました。

同日午後一時より、本堂にて一光三尊善光寺如来御開扉法要を厳修いたしました。御詠歌講による宗歌の奉唱の中、

## 令和三年 宗祖真盛上人鑽仰会 真盛上人霊場第一番 戒光山西教寺・石碑建立除幕式法要 鑽仰会法要 一光三尊善光寺如来御開扉法要 総会

令和三年十一月九日(火)午前十時より、総本山西教寺宗祖大師殿の唐門脇にて、宗祖真盛上人第一番霊場石碑建立除幕式法要を厳修いたしました。

分部の本願寺、瀬田の青嶠寺両御詠歌講が宗歌を奉唱される中、御導師鑽仰会会長・川合歳明師、式衆として本

山内局、鑽仰会役員が石碑前へご参集、除幕式中宗祖大師二十五霊場第一番の御詠歌を唱和し、続いて圓頓章・觀經文のあと、不断念佛相続十九萬日大法会百八念佛をお勤めました。今般の石碑建立に際し、多数の方よりご浄財を賜り、厚く御礼申し上げます。石碑建立ご浄財ご寄進者名簿、記念写経は石碑下にお納めし、ご浄財寄進者のご芳名は、本会機関紙『みちびき』第5号に掲載しました。



一光三尊善光寺如来の御開扉



大導師 西教寺貫首 武田圓龍猊下

大導師 西教寺貫首 武田圓龍猊下、式衆として役員がご入堂され、御本尊前にて圓頓章を誦誦。続いて、宗祖大師二十五霊場第一番御詠歌を奉唱し、善光寺如来の御宝前へ参進。善光寺如来御詠歌第一番を唱和の中、御開扉され、三帰依文、懺悔文、發願文、開經偈、菩薩戒經偈を誦誦の後、善光寺如来御詠歌を唱和し回向伽陀で終えました。



鑽仰会法要 大勢の参詣者

御開扉法要の後、鑽仰会総会を開催しました。西徳寺・寺崎礼允師を議長に議事進行され、事務局より令和二年度活動決算報告があり、内田一豊監査役による監査報告がされ、拍手で承認され、続いて令和三年度事業計画・予算を審議、可決承認されました。

宗祖真盛上人の御遺徳に報謝すると共に、別時念仏を参加者一同で行じ、来年度厳修の不断念佛相続十九萬日大法会に向けて、益々氣運が盛り上がる一日となりました。なお、滋賀教区の団体参加者は、総会終了後に大津市歴史博物館で開催されていました『西教寺―大津の天台真盛宗の至宝―』展を鑑賞しました。

来年度の総会は、武生の引接寺にて九月頃を予定しております。



ひな人形展

## 人形供養法要

三月三日 午前十時

阪神大震災で行き場を失った  
ひな人形の相談からはじまった人形供養  
ひな人形展  
二月十日～三月十日

平成七年（一九九五）一月十七日に起こった阪神大震災。多くの方が被災され行き場を失いました。あれから二十七年。復興はほぼ終わりましたが、人々の心の傷は簡単に癒えるものではありません。西教寺へ被災された方からある相談がありました。

「倒壊した家の始末をしている中で、子どもの成長を見守り続けたひな人形をどうしたら良いのか。お寺で供養をしていただけないか」という内容でした。

西教寺では、阪神大震災で被災された方から寄せられた相談をきっかけに、たくさんの方が困っているのではと平成十一年（一九九九）より始まったのが「人形供養法要」です。

今年で二十三年目を迎えます。毎年、多くの方より、子どもの成長を見守り続け、役目を終えたお人形の供養のご依頼が後を絶ちません。

檀信徒の皆さまで、お人形の供養をご希望される方は、西教寺までご相談ください。

西教寺では、お預かりいたしましたお人形を二月十日頃より三月三日まで、役目を終えたお人形へ感謝を捧げる旨、



人形供養法要

もう一度ご参拝の皆さまにご覧いただくとうと本堂へ安置しております。

ひな祭り・桃の節句である三月三日午前十時より武田圓寵猊下の御導師のもと、人形供養法要を行っております。

持ち寄られた、ひな人形のなかには、大変歴史の古いお人形や大変貴重な文化財的価値のあるお人形などもあります。供養を終えた後、このまま役目を終え、誰にも見てももらえないのは大変忍びないということで始まったのが、「ひな人形展」です。

日本でひな人形のお飾りが一般に始まったとされる江戸時代から幕末・明治・大正・昭和・平成とその時代を反映したひな人形たち約五百体を展示しております。

ひな人形をこよなく愛し、ひな人形の専門家であらうとします藤原愛子先生に持ち寄られたひな人形をご覧いただき、展示の監修など多岐にわたのご教示いただいております。

また、展示中は、お時間の許す限り藤原先生にお越しいただき、ひな人形のご説明などを行っていただいております。

期間中は、ひな御膳



ひな御膳

（二二〇〇円税込・要予約）もご提供させていただきます。是非、皆さまご参拝にお越しの際には「ひな人形展」をご拝観ください。

## 編集後記

表紙の写真は本坊玄関右側、西教寺のお客様をお迎えする虎之間に掛かっている掛け軸です。（江戸時代作）

「寅」は、強く大きく成長するといったことを表しているそうです。

寅年の今年は、昨今の様々な社会問題が発生する中で古い制度や枠組の改変による新たな環境への適応力が試される年なのかも知れません。新型コロナウイルスに打ち勝ち、日本そして世界の人々の笑顔が輝くような、そんな一年になってほしいと願っています。

## 檀信徒の皆さまへお願い

総本山西教寺にご参拝の際は、先にご配布させていただきました「檀信徒用無料拝観券（ご家族五名様まで）」を必ず受付へご提示ください。紛失された方は、本紙（寶珠）をお持ちいただきご提示いただきますよう、お願い申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

電話 大津（〇七七）五七八〇〇一三番代

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話（〇七七）五三三二二四一